風の中の子供

1958. 11～12

上映映画解説

No. 56

風の中の子供

松竹大船映画1937年作

原　作……坪田　譲治
脚　色……斎藤　良輔
脚色・監督……清水　宏
撮　影……斎藤　正夫

―― キャスト ――

父親……河村　黎吉
母親……吉川　満子
善太……葉山　正雄
三平……爆弾　小僧
おじさん……坂本　武
おばさん……岡村　文子

1937年11月11日大阪劇場封切

「風の中の子供」と清水宏

岩　崎　昶

清水宏は大船調のメロドラマも作ったし、「若旦那もの」といわれる東京下町の風俗喜劇などもなかなかうまく作ったのであるが、いまではそっちの方はどちらかというと忘れられた形で、「子供もの」の作家としてもっとも名高い。たしかに、彼の独自の、ほかの人にはまねのできない境地は子供の世界を描いた映画にあるので、また彼自身いまでもいちばん手がけてみたいと願っているのは「子供もの」なのである。

「風の中の子供」はたしかその彼の「子供もの」の第一作である。

1937年（昭和12年）といっても今の若い人にはピンと来ないかもしれないが、つまり日本が中国に戦争を持ちこんだ年、その年の作品である。まだ非常時体制だの映画報国だのというかけ声はおこっていなかったが、それでもこの年からすでにいくつかの戦争映画が出ている。迫ってくるファシズムの足音をもう私たちは予感していた。そういう中で、この「風の中の子供」の素朴で平和な童心と牧歌の世界は私たちにじつにみずみずしい救いであった。いい映画だったといまでも私は思い出し、そして清水宏にこれをもう一度作りなおして見たらどうだというが、彼はけっして承知しない。彼は正しいのかもしれない。追憶が多くを美化し、すぎさった20年のノスタルジアが私の心を甘くしているのかもしれない。今度のフィルム・ライブラリーでの上映を機会にぜひもう一度見なおしてみたいと思っている。

この映画の原作を書いた坪田譲治も「子供もの」の専門であった。善太、三平の兄弟少年を主役にした作品を次々と書き、当時の人気作家となった。もっともこの人気には、清水の手による映画化そして大衆化があずかって大きな力となっている。そこで、坪田＝清水というたがいに得がたいコンビが生れ、それによってこの映画につづいてやはり清水の代表作の一つ「子供の四季」が生れることになる。

映画の中で子供を描くこと清水に及ぶものはないという定評であった。少年を主人公にして映画はほかにももちろんあったわけであるが、たいていはそれが大人の眼から見た子供であり、あるいは子供に仮托した大人の心理であるのがつねであった。清水の特長は、作者がすでに子供になりきっていることである。だから、子供がみんなほんとに生きていて、自然な生活をしている。

清水はロケーションが得意だといわれる。たしかに彼は自然詩人である。彼のキャメラを通して、自然は美しくわれわれに語りかけてくる。しかも、子供たちというものは、家の中で机の前においてではなく、野原や田の中や河原や橋の上や、つまるところ自然の中でのびのびと遊びまわっているときにほんとうの子供である。清水の子供は、勉強が好きで、学術優等操行満点などというのはひとりもいない。その代り彼らはいつもエネルギーにあふれ、いつも何かいたずらのタネを見つけ、いたずらをし、木に登り、歩くことはすくなくいつも走っている。

清水はしんそこから子供が好きである。そして子供はまた清水を好きである。彼と子供との結びつきがなまなかのものでないことは、戦後の「蜂の巣の子供たち」や「大仏さまと子供たち」が証拠だてている。敗戦、後日本のいたるところの巷をボロを着てうろつき、空腹をかかえ、餓えにせまられれば物乞いをし、ときにコソ泥をやっている小さな天使たち、戦災孤児や浮浪児たちの存在ほど彼を苦しめたものはなかった大人たちはこの戦争についてそれぞれの程度に責任がある。苦しんでも仕方はない。けれども、子供は何も知らない。その子供たちまで何で罰されなければならないのだ。――清水はこうして、街の浮浪児たちをひきとって世話をしだした。10人や15人の子供たちを救ってみたところで、この荒廃した日本の社会でどうしようもないことはわかっている。が、それでもなおかつ自分のまわりに眼に見える子供たちだけでもほうっておくわけにはいかなかった。こうして、清水のまわりに、親鳥をとりまく小鳥たちのように、幼い孤児たちが集まり、「蜂の巣」が出来上り、その副産物として戦災孤児の物語「蜂の巣の子供たち」が生れた。「風の中の子供」を作り出したものは、この清水宏のひろい人間愛以外の何物でもない。

「風の中の子供」は淡々とした調子で、強いドラマも、起伏の多いストリーもない。冗長といえば冗長であろう。だが、ここには映画でしか描き出せない、そしてまた清水しか描きえない詩がある。このような映画は近年の日本映画にははなはだまれである。20年前の旧作が今日の映画の手法に反省をうながすところが多いことを私は信じてうたがわない。

私たちがいくらすすめても、清水宏が旧作の再映画化をがえんじないことは前に書いたとおりである。彼はもっと新しい時代の新しい子供たちを描こうとしているのであろう。とにかく、いまでも彼は「子供もの」を自分の芸術の本領だと思い、それもできれば企業のワクにしばられず、自分で資金を工面して、好きな短篇を悠々と作っていたいのである。

（11月23, 26, 30日, 12月3, 7, 10, 14日の7回，毎回2時から上映）

国立近代美術館フィルム・ライブラリー